中村雄二郎の「臨床の知」に関する研究

―芸術への展開に向けて―

（要約）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期　人文学専攻

学生番号：D196242

氏　　名：鄭　西吟

本論文は哲学者中村雄二郎が提唱した「臨床の知」という哲学概念の内的構造と現実への応用を考究する試みである。近代以降、科学が発展する中で科学的な物の見方も社会に浸透してきた。それは、普遍・客観・論理を重視する見方であるが、この見方が急速に広がることで私たちが古来重視してきた特殊・具体的な生をも射程に入れたホリスティックな見方の意義が欠落していった。普遍性は物事を場所と時点から抽象し、コスモロジーを軽視した。客観性は物事を対象化し、主観的感情をないがしろにした。論理性は単線的な因果関係を重視するが、生活世界の生き生きとした生の豊かさや有機的な関連を描き出すことができていない。それゆえ、科学が万能視される現代においてこそ、そこからこぼれ落ちた個別性・感性・多義性を重視する新たな知が要求される。そうした脱近代の思潮のうちに哲学者の中村雄二郎の説く「臨床の知」は位置づく。

本研究の独創的な点は、この中村の「臨床の知」を芸術という営みの内に再構成し、その現代的意義を浮き彫りにすることにある。中村は著書『共通感覚』(1979 年）において、物事を全体的に把握する人間として、芸術家の存在が重要な意味を持っていると語る。たとえば、絵画を描く場合、芸術家は優れた技法や豊かな想像力を使って、感性に浸された自我を色彩や図形の組み合わせの内に描き込んでいく。その営みを通じて、絵画作品は芸術家の感情・感性・イマジネーションを体現し、知を顕在化させる。この意味で、芸術は「臨床の知」と同じホリスティックなアプローチをとり、「臨床の知」を内面化する方法の一つと考えられる。それゆえ、本研究は「臨床の知」の構成原理を究明した上、この概念と芸術との類似性に注目し、芸術的実践が有す

る治療的役割を介して､「臨床の知」の現代的意義を描出することを目的とする。

本博士論文は、第一部「臨床の知」の理論、第二部芸術の原理、第三部「臨床の知」の展開としての芸術、の三部によって構成され、それぞれ以下の内容で展開される。

第一部では、第一章と第二章において、主に中村の『臨床の知とは何か』（1992 年）を軸に､「臨床の知」と「臨床医学｣､「臨床の知」と科学への比較考察によって､「臨床の知」の全体像と意義を明らかにする。第三章から第五章では、中村の『場所（トポス)』(1989 年)､『共通感覚論』『現代情念論』(1962 年）に基づき､「臨床の知」の三要素である「場所」｢共通感覚」｢情念」の意味を検討することによって､「臨床の知」の理論構造を描き出した。

具体的には中村論では､「臨床の知」は、客観性・論理性・普遍性ばかりを重視する「科学の知」の弊害を克服する、具体的な生に根ざした知として提案された。その内実は、存在の深みから生命を語る「場所」を見据え、意識と無意識をつなぐ体性感覚的統合としての「共通感覚」や、無意識下の想像力によって心の機能を活性化させる「情念」を拠り所とするものであった。そうした三原理に基づき、我々は具体的な場面において、感情的交流を通して相手を全体的に捉えることが可能となるとされた。

第二部においては、中村の「臨床の知」と芸術との関係を解明するため、一般的な芸術論との比較考察を行う。第一章と第二章においては、美学者竹内敏雄による『アリストテレスの芸術理論』(1969 年）と美学研究者上村博の『身体と芸術』(1998 年）における論考を取り上

げ、芸術の創作側と鑑賞側の両方面から芸術作用（自己表現と自己形成）の内実を探り、そうした芸術作用と「臨床の知」との関連性について論及する。芸術家は外部感覚である視覚と身体感覚である目の筋肉感覚の統合を用い、模倣対象を偏りなく全面的に見ると同時に、間接的に触り、無意識的想像力によって対象の質と輪郭を同時に正しく把握し表現する。このような芸術では、ロゴス的に像の質が正確に把握されていると同時に、創作する際の芸術家自身の内面に起こるパトスもまた適切に表象されていく。そして、この内面に生じる心の表象はさらに創作の「指導的動機」として、形成しつつある芸術作品と交互作用してともに変化を起こし完成へと向かう。こうして、無意識的想像力を介した「ロゴスとパトスの総合統一」という真の芸術の形が現れ、このような芸術作品はまさに中村の説く「臨床の知」の顕在化したものといえる。さらに、真の芸術を鑑賞する際にも、「臨床の知」の捉え方に一致するプロセスが現れてくる。このプロセスを本論では、身体による演技的芸術鑑賞と称した。この見方では、鑑賞者は、作品から受動的刺激を受け、身体全体の感覚を全面的に働かせ、能動的に追体験すること（身体的演技）によって作品の構造を自己の内に再構成する。この鑑賞過程を経て、鑑賞者は作者の独自な世界に通じることができ、さらに真実在としての普遍的世界にも繋がっていく。このような鑑賞プロセスによって、鑑賞者は喜びやカタルシスを体験することができる。

　第三章では、美術史研究において指摘される遠近法をめぐる近代芸術の問題性とその克服に向けた芸術革新プロセスを考察し、そのプロセスと「臨床の知」の誕生過程との類似性について論証する。絵画法

の歴史を考える時、特にルネサンス期の「線遠近法」は空間・世界を正しく見たいという欲望から生まれた最初期の図法であり、一時的に隆盛を誇る。しかし、それ自身の極端な合理的で局限的な性質によって次第に衰微・崩壊していく。そして、それに代わって現れてきたのがピカソによって確立されたキュビスムである。キュビスムは一見分かりにくい芸術表現と感じられる。だが、キュビスムは、過去の既成規則を大胆に破壊するという革新的な意義を持つ一方、その多視点的表現手法は感覚的知覚対象を全面的本質的に捉える態度を基本とし、「臨床の知」と同様に、現代の我々のものの見方に貴重な示唆を与える。キュビスムは芸術家の主観主義絵画の一つの重要な芸術様式であるが、その主観には本質的な客観的現実が潜んでいる。つまり、キュビスムという芸術様式において、「臨床の知」が求める内在的現実と外在的現実の統一が実現していることが見て取れるのである。

第三部では、第二部で解明した自己表現と自己形成に寄与する芸術の働きについて、中村自身の芸術論『魔女ランダ考―演劇的知とはなにか』（1983 年）を介して、再び「臨床の知」の内に位置づけることを試みる。魔女ランダはバリ島の伝統演劇における重要な人物であり、バリ文化の象徴でもある。魔女ランダを中心とする独特な文化を持つバリ島には、イメージ・象徴を重視する「シンボリズム」の意義や、意味付けられたシンボルに充ちた「コスモロジー」の世界が、ともに演劇としての「パフォーマンス」を通じてパトスの世界とつながる、という知のモデルが見られる。演劇の町で育った中村は、バリ島での文化体験を糸口に、近代の「科学の知」に抱いてきた違和感を、新たな知の範型である「演劇的知」によって克服をはかったといえる。こ

の「演劇的知」は、まさに「科学の知」の拡大によって見失われた三要素（「シンボリズム」「コスモロジー」「パトス」）の意義を、総合芸術の内に体現し、後に様々な臨床場面で生きる「臨床の知」へ発展していく。

加えて、中村は、治療教育の専門家である川手鷹彦と対談し、「治療教育」における芸術の意義を論じた著作『心の傷を担う子どもたち―次代への治療教育と芸術論』（2000 年）を著している。この本をもとに、最後に「臨床の知」と芸術と療育（自己のリカバリー）とをつなぐ応用倫理学（教育倫理学）の可能性について言及した。

現代のような頭脳重視・成績偏重、能率・効率優先の教育は子どもの開かれた感受性を閉塞させる方向に進んでいる。その間違えた進行を食い止めるために、学校教育に「臨床の知」の一アプローチである芸術を取り入れることが有効視される。それによって、抑圧やゆがめられた心身を開放し、自己の内奥から貫かれた「開かれた感受性」を回復させることが可能となる。何故ならば、第二部で検討したように、演劇・音楽・造形芸術などの全ての芸術活動は、芸術創作でも芸術鑑賞でも、特定な非日常的な場に入り、豊かな想像力を起点とする体性感覚を介して芸術や芸術の中に含まれる自然に共鳴・共振するからである。そして、こうした芸術による体性感覚を通して、我々は普遍性や、自分らしさ、自他の不完全性、痛み、喜び等を感じ取り、力強く肯定し表現することが可能となるのである。この意味で、今日、我々は芸術を介した「臨床の知」の応用倫理学的実践の可能性を治療教育、さらには広く教育に波及すべきものと考える。